文藝

ぶんげい分科会

朝の改札口。リクルートスーツを着た真面目そうな女性が目の前を通りすぎる。
たしかあの子、一昨日の夜もこの場所で見かけた。地雷系コーデで着飾って、冴えない中年男性と初対面の挨拶を交わしていた子だ。
彼女にとってはリクルートスーツも地雷系コーデも、同様に懐を肥やすための装いという訳か。

Twitter × 文藝

「私、妊娠したかも」と電話で告げられた。
そんなバカな、彼女とはもう半年会っていない。
もしかしたらと思って、近くの公園へ急ぐ。
身にしみる寒さを我慢して、滑り台の上に登った。ここからなら月がよく見える。
もちろん、月は1つしかなかった。だけど、目が涙で滲んで、月は2つになった。

「うち、好きな人できたんだよね」
女子2人で一泊二日の箱根旅行。親友のユナがヘアアイロンで髪を巻きながらそう言った。
私の幼馴染みと付き合い始めたこと、本当はもう知ってるけど。
ネイルの色を変えたのも気づいてる。あいつが好きなオレンジ色に。
でも私は、そういうユナが好きなんだと思う。

オリジナル140字小説13選

空き家の井戸の横で本を読んでいる少年を見つけた。中学生くらいだろうか。
「何を読んでいる」
「『ねじまき鳥クロニクル』の3冊目」
「ねじまき鳥は見つかった？」
「あるいは」と彼が言った。視線は本から離れない。
「やれやれ」と僕は思った。タフな15歳という言葉が脳裏に浮かんだ。

「やった！　赤ちゃんだ！」
クリスマス。プレゼントボックスから取り出されたのは人間の赤ん坊。
「大事に育てなね。前のは1ヶ月で死んじゃったから」
息子の頭を撫でる。クローン技術が発達した今、赤ん坊はクリスマスプレゼントの定番だ。
息子の頭を撫でながら、ふと思う。あれ、この子は私の子？

ウサギの朝は早い。顔を洗い、朝食の支度を済ませ〝ファミリー〟のネズミを起こす。とはいえ私達は自分で動けないので、お嬢様が代わりに操作してくださる。お嬢様は言う。
「今日はおばあちゃんとおもちゃ屋よ！」新型の赤い屋根の館が気になっていたので丁度いい。上手くねだってくれるといいのだが。

最近、耳かきをしてもらうシチュエーションのボイスにとても癒やされている。今日は聞きながら昼寝していたのだが、びっくりした。本当に耳かきされているような感じだったのだ。起きたら自分の部屋に幼馴染みがいたので、その事を思わず報告してしまった。
「バーカ、私に決まってるじゃない……」

靴が歩いて行く。それを追いかける。穴に落ちた先、ワンダーランドの道をゆく。薔薇の迷路を突っ切った。チェシャ猫が笑いながら靴を蹴り飛ばす。眼前に落ちたそれを履く。赤いインクと刷毛が現れる。
「薔薇を塗ろう！」と叫んだ瞬間目が覚めた。ウサギ柄の目覚まし時計が鳴っている。

初めまして私。鏡に映った私は明るくて素敵だった。でもちょっと油断すると、それが私だってわからなくなる。でも手で触れてみると、それは確かに私だった。すてきな笑顔が良く映えるね。まるで無敵になったみたい。もう何も怖くない。何だってかかってこい。ハロー金髪の私。生まれ変わった私。

私は真美香。幼馴染の慎二のことがずっと好きだ。だけど最近近くに越してきた健のことも気になっている。慎二とは毎晩ＬＩＮＥ電話、健とはこの前映画に行った。
通学路。今日は思い切って手を繋いでみた。こんな恋愛もアリかもしれない。
と、街行く3人の手を繋いだ男女を見て、妄想している僕だった。

外は銀世界。カーテン越しにちらつく影に誘われて、本を閉じ窓際に寄る。上から下へ絶え間なく降る雪。無意識のうちに頭も上下を繰り返す。こんなに視線を奪っておいて、でも地面に積もれば白い床。なんて無責任な奴らだ。逃すものか。
取り憑かれた様に目を凝らす。止められない楽しさがここにある。

目に見えない分断のせいでここに入れたのは２０２１年、春。半年間は画面越しの参加だった。「対面では初めまして」を何回も言った秋。苦しかった記憶を塗り替えた学祭。自分の好きに突っ走って記事を書いていたら、すぐに1年は過ぎてしまった。今までお世話になりました、おかげで青春を取り戻せました。

目覚ましが鳴る。目を覚ます。戦闘開始だ。
足首から先を冷気に晒す。だがしかし、眠りに再度引き戻される。
意識を取り戻す。2分も無駄にした。次は両腕。肩が寒い、けれどまだ瞼は閉じようとしている。
ハッとして目を開ける。5分が経過した。まずい、遅刻する。
……今朝も布団が、私を逃がさない。

今日は最良の日

しろくま太郎

ジャケットにスチームをあてる。靴は左の靴から磨いた。緑のハンカチをポケットに入れたのも確認した。どれも俺にしては珍しい。

今日は勝負の日だ。俺の両親に彼女を紹介する。すでに母親と彼女は一緒に食事をしたことがあるらしいが、4人そろうのは初めてだ。婚活を始めて約2年。やっとここまで来たから、絶対失敗したくない。でも俺は緊張しいで、お守りに頼っている。誰にも話せないけれど。

「あなたは誕生日に、人一倍守られている。大切にしなさい」

半年前、同僚と呑んだ帰り、勢いで占いに行ったときに言われた。そのときは聞き流していたが、翌月の婚活パーティー。ふと占い師の言葉を思い出し、誕生色の緑のハンカチを持って行った。

誕生日はたしかに俺を守ってくれた。今まで女性と話すとどもってしまうのに、にこやかに話せる。顔が赤くならなかった。1年間パーティーに参加して誰ともマッチングしなかったのに、初めてマッチングできた。さりげなくデートに誘うことができた。そのとき出会ったのが今の彼女。

それからの俺は、「誕生○○」に頼るようになった。朝起きたら占いをチェック。最近はしめじ占いを見てる。誕生石が埋め込まれた腕時計を買い、デートの日は着けるようにしていた。彼女の誕生日を聞いて、俺との相性を確認した。努力すれば実るらしい。やるしかない。俺は誕生日に、誰よりも守られているんだ。

そして今日。レストランで会うことにした。俺の両親、俺、彼女の誕生日と方角を掛け合わせた最良の日、最良のレストラン。俺は個室のドアの前に立つ。今日のしめじ占いで、左手でドアを開けると幸運がやってくるって言ってたな。誕生日に守られているとはいえ、さすがに緊張してきた。

ドアの向こうから母親と彼女の話し声がする。いつの間にか、俺より先に到着していたらしい。思わず耳を傾けてしまった。

「そういえば尚人さん、誕生日がお正月なんですよね。毎年おせちとケーキを食べるから太るって言ってて。珍しいですよね」

「これ話すの、麻友さんが初めてなんだけど……。実は、尚人の本当の誕生日は大晦日なの。あの頃は大晦日が一番仕事で忙しくて。お医者さんがみんなに忘れられるくらいなら、次の日にして覚えてもらった方がいいって言って……」

大晦日!? 文章を覚えるくらい読み込んだ、誕生日占いの本を思い出す。たしか12月31日と4月6日の相性は……。

俺は右手でドアを開けていることに気づいた。

もうすぐ世界が終わると聞いて

親王

NASAから隕石衝突の予報が出された。衝突は1週間後。現代の科学技術ではどうにもならない大きさとスピードで、小惑星は地球に迫っているという。

そのニュースを聞いて、私は肩の荷が降りた。楽しくない司法試験の勉強は、もうしなくていい。1週間後に地球がなくなるなら、1年後の司法試験はあり得ない。

参考書をゴミ箱のなかに放り込んだ。スマホは使えない。きっと携帯会社はもぬけの殻なのだろう。1週間後に世界が終わるのに、仕事を続ける人は珍しい。

外に出ると、町はひっそりしていた。並ぶ住宅の向こうに、青い屋根の家が見える。

「翔太……」

司法試験に集中したいんだ。そう言って、翔太の告白を断ったのは2ヶ月前のこと。中学のときからずっと好きだったのに、頷けば幸せになれるって知ってたのに、私は首を横に振ってしまった。

気がつくと私は翔太の家の前にいた。翔太の部屋の窓を見上げる。

「よお」

「わっ」

突然後ろから声をかけられて、びくりとした。振り返ると、翔太が笑顔で立っていた。右手をポケットに突っ込んで、眩しいほどの白いシャツを着ている。いつもの翔太だ。

「何してんだ、こんなところで。入れよ」

翔太は言って、私の腰に手を回した。翔太にしては大胆な振る舞いだ。もうすぐ世界が終わると聞いて、翔太は少し大胆になったのかもしれない。なら私だって、大胆に振る舞ってやろう。もうすぐ世界が終わると聞いたから。

「うん」

私は翔太の部屋にあがった。

「お母さんは?」

翔太の家の中は無人だった。柴犬の声もしない。

「犬連れて、父さんとどっか行ったよ。死ぬまでに見ときたいものがあるとかなんとか」

「そっか」

いつの間にか、翔太の腕は私の後頭部に回っていた。

「翔太はどこにいたの?」

「理奈の家だよ。行ったら、さっき出てったって言われてさ」

翔太の唇と私のそれが重なる。私は目を閉じた。

翔太との時間が終わったら家に帰って、存分に絵を描こう。藝大に落ちて以来しまいっぱなしの道具を引っ張り出して、思いっきり絵を描こう。そしたら今度は本屋に行って、読みたかった漫画を一気に読もう。一応代金は置いとくか。それに駅前の高級和菓子屋のお菓子も全部食べよう。あとは、あとは……。

気がつくと私は泣いていた。とめどなく涙が溢れてくる。翔太の背中を強く抱きしめる。もうすぐ世界が終わるのに、どうしてこんなにも幸福なんだろうか。いや、もうすぐ世界が終わるから、こんなにも幸福なんだろうか。

わからない。わからないけど、この時間が続いてほしい。世界がもうすぐ終わる世界が、ずっと続けばいい。

世界が晴れたら

川渡

「突然なんだけどさ」

「次のデートで、別れよう」

「え？」

突然、目の前で君が口にした言葉。

別れる？　しかも次のデートで？　動揺しすぎて頭に酸素が回ってこない。背中を冷や汗が伝う。

どうして、とやっとのことで絞り出した私の声は確かに君に聞こえたはずだった。それでも君は何も説明してくれず、苦しげに眉を寄せて謝るだけ。そんなに辛そうに、ごめんなんて言わないで。変わりようの無い事実だと、ずっと続くと思っていた幸せが失われようとしているのだと、受け止めるしかなくなってしまう。ずっと隣にいられると思っていた。でも、そうではないみたい。

理解を拒否する頭とは裏腹に、君との「最後の日」が近付いていた。

「次のデート、どこ行きたい？」

「……イルミネーション見に行きたいな。初デートで行った場所」

「いいね、綺麗だったよな。最後にピッタリだ」

次のデートが最後なのは、何の冗談でもないのだということが、君の言葉の節々から伝わってくる。最後だなんて言いながら、スマホで思い出の写真を見返して懐かしんでいる。カラフルな電飾で飾られたモニュメントの前で撮った初めてのツーショットを見せてくる。柔らかに目を細めて微笑むその表情だって、もう素直に信じられないよ。

「来週の土曜日、空いてるだろ」　いつも休みの日を合わせて、最低でも月に1度は出かけていた。もちろん空いているけど、この状況でデートを楽しめる人がどこにいるのだろう。処刑日が決まった死刑囚みたいだ。今をどう生きても、最後にはすべて失う。

「ねえ、本当に次で最後なの……？」　諦めの悪い私は懲りずに聞いてしまう。でもやっぱり君はごめんと言う。目を逸らさず、誤魔化そうともしない真剣さを前に私は何も言えなくなってしまう。

金曜日。天気予報が明日の悪天候を告げる。これは、神様の救いだと直感的に思った。すぐさま私はLINEを開いてメッセージを送る。

『せっかく最後に出かけるなら、晴れの日がいいな』

想像よりも君はあっさりとデートの延期に承諾した。たったの1か月だとしても、まだ一緒にいられる。私は自分の寿命が延びたような感じがして、何気ない会話一つひとつに幸せを再確認するようになった。でもふと、そうやって当たり前の日々が続いていることに少し違和感も覚えていた。別れを切り出すくらいなら、もう君に私を大事に思う気持ちはないはずだ。それなのに、仕草も会話のトーンもいつも通り。むしろ以前よりも言葉に丁寧さや、優しさが感じられることすらある。それに何かを惜しむような、何かとても大事なことを隠しているような様子を何となく感じるから、私はまだ心のどこかでさよならを信じ切れていない。だけど、辛そうに謝る君が冗談を言っているようにもどうしても思えなくて、デートの延期日に雨が降るのをひたすら祈ることしかできずにいる。

その切実な祈りは、本当に神様に届いているのかもしれなかった。次のデートの予定日も、台風が直撃して延期された。その翌月の休みも、雨が降りしきる。こんな偶然があっていいのだろうか。私はまた寿命が延びた心地がした。今まで神様の存在なんて考えもしてなかったのに、近頃は神様が見ている気がして、善い行いをしようだなんて気持ちが芽生え始めた。我ながら都合の良い頭だ。でも、都合が良くて、大切な人ともっと長くいたいと思って、何がいけないんだ。このままずっと、世界が晴れなければいい。最後のデートにさえ行かなければ、君が遠くなることもないのでしょう？

3回連続デートが先送りになっても、君は何か目立って異議を唱えることはしなかった。ただ、段々と目に困惑の色を示し始めているのがわかる。それなのに、失う恐怖に打ち勝つ自信の無い私はそんな君を受け止めきれず、気付かないふりをしている。いつも通り接してくれるのは、根っから優しい君があまりにも悲しむ私を突き放しきれなかったからなのかな。もしそうなら、君の気持ちを少しも察せない上に優しさに甘えて、ただ己の幸せだけを考えている自分はなんて最低なのだろう。一見いつも通りだと思っていたけど、よく気にして話してみると前よりも元気がないように見える。明るい笑い声をあげて笑うことが減った。話題をふっても考え事をしているようで微妙な返事が返ってくる。暇な時にLINEをしたらいつもすぐにつく既読も遅れがちだ。いつからだろう。いつから私は君の小さな変化を見逃してきてしまったのかな。君は、今何に苦しめられている？　助けたいと思っても、私にできることはきっとたった1つ。君の言葉を信じて、次のデートでお別れすることだけなのだろう。私は、自分に残されたあと少しの時間を想像した。出来るだけ、笑って過ごしたい。出来るだけ、隣で過ごしたい。そして最後に、世界一綺麗なイルミネーションを見に行こう。

自分なりの決意を固めて、君に寄り添おうと決めたその翌朝。君から電話がかかってきた。輪をかけて珍しい事態に眉をひそめつつ通話ボタンを押すと、何度か聞いたことのある女の人の声が聞こえてきた。

「ごめんなさい。どうか我儘な息子を許してあげて……」

君のお母さんの声だった。泣いていた。泣きながら、私が想像もしていなかった真実を告げる。

君は昨晩、もう二度と会えない所に行ってしまった。少し前から心臓に病を抱えていた。本来なら余命はあと3ヶ月ほどだった。ただ、いつ発作が起きるかはわからない不安定な状況にあった。

急にいなくならないために、私がすごく悲しまないように、わざと君は元気な姿でさよならをしようとしていた。それでも、きちんと最後に思い出も作ろうとしてくれていた。

雨が降る度、私は君の寿命を奪っていたんだね。神様は、ちゃんと私を見ていた。これはきっと、自分の事ばかり考えて、今しか出来ないことを大事にしなかった私への戒め。電話から聞こえてくる声は意味を捉えぬまま脳内を通り過ぎる。次から次へと涙が溢れてくる。何に泣いている？　後悔？　悲しみ？　私に泣く資格なんてないのに。この先もずっと罪の意識を抱えて私は生きていくべきなのだろう。ごめんなさい。

……皮肉なことに、君を失った数日後。予定されていた5回目の最後のデートは晴れだった。雲ひとつない晴天を見上げて睨む。今更晴れたって、もう遅いのだ。